

発明文化論

〈第 59 回〉

丸山 亮

冗長性と創造性

ひところ扁桃腺は人体に無用なものと言われ、炎症を起こすのを嫌って切除が積極的に行われていた時期があった。子供のころ、その切除をされるのではないかとおびえていたことを思い出す。ところが近年、扁桃腺は免疫に一定の役割を果たしているのが知られている。

また、人の DNA の全遺伝情報ゲノムでも、遺伝子として働くのは数%にすぎず、残りは無用と思われていた。しかしこの一見無用の部分が、情報のつなぎ合わせや、重複させて新しい機能を生むなど、遺伝子を制御する役割を持っていることが明らかになってきた。細菌は余分な塩基をつくる無駄を省いて速く分裂するため、高等生物のような遺伝子の遊びは少ないようだ。高等生物はさらに、有性生殖を含む面倒な増殖の手続きを導入することを戦略とした。そして、生物では遺伝的な多様性の高い集団の方が低い集団よりも感染症などに対抗する力が強く、環境の変化に適応しやすいため、生存には有利だという。

ところで地球上には高等、下等さまざまな生物が存在し、生物多様性の保護が課題となっているが、資源による利益配分の話以上に、多様性が生物全体社会の保全と密接していることをもっと意識しなくてはならない。新参者の人類が他の生物を保全するのは倫理的な義務であるだけでなく、自らの生存にもかかわっているからだ。

さて、遺伝子レベルで冗長性が重要な意味を持つと同様、生体でも不活発と思われる部分が意外な働きをしているらしい。脳は寝ているときや何も考えていないときでも、ただ休んでいるわけではない。無意識のうちに記憶を更新したり、将来に備えて予行演習をしているといわれる。睡眠や休養には、脳の働きを助ける積極的な意義がある。数学者アダマールや心理学者のユングがいうように、無意識下で新たな創造に結び付く作業が行われているのだとすると、無駄と思われるかもしれない雑多な経験や知識がどのように役立っているのか、興味深い。冗長という判断は意識の働きによるもので、無意識の領域では、それらすべては等価のものとして控えていることになる。さらに意識のレベルでも、隠喩を通じて一見無関係なものから、新たな創造に至ることもある。冗長の意義はここにも認められよう。

こうした事例を並べてみると、文化的なアナロジーに思いが行く。食客三千という中国の故事があった。穀潰しと思われていた食客が非常時に役立つ話だ。人間が営む文化でも、単純化は危険である。今世界は均一化、画一化が急速に進行する一方で、先住民、少数民族の言語をはじめとする伝統文化は消滅の危機にある。文化的な多様性も、人類の生存戦略として心にとどめておくべき課題だろう。多様性は冗長性の類縁であり、単調や効率の対極にある。

19 世紀から 20 世紀にかけて文化の流れを見ると、伝統の桎梏を離れたモダニズムがまず目に入ってくる。過剰な装飾や遊び、無駄が廃され、機能を重視した単純なものに嗜好が移っていく。もっとも無駄を標榜したダダイズムのような運動も、反伝統を強調するモダニズムの一部であった。ところがそのモダニズムの行きつくところ、機能的ではあるが単調で味気ないものが増えてくると、20 世紀の後半になって、装飾や反復に新たな意味を見出すポスト・モダンへと回帰する。冗長性は再び日の目を見ることとなった。そして 21 世紀の今日、私たちはどこへ向かおうとしているのか。

先の震災の被害が大きかったのは、想定外のものへの備えを欠いていたことも理由にあげられる。効率の追求が優先され、社会全体に遊びや溜めが少なくなかったか。文化が発展するためには、この遊びや溜めを許容する冗長性、多様性を認めていかななくてはならないだろう。そこに次の時代を創造する鍵がある。

(まるやま りょう 共生国際特許事務弁理士)